

「和讓」思想：東洋文化の核心



中日経済文化交流協会北京事務所長
元新華社通信日本代表 張 可喜

「和」の思想は「中国古典名言録」の三大テーマである「和諧、環境保全、健康」の一つである。東洋文化（東洋文明ともいえる）の核心である。

「和讓」の思想は島根県に生まれ、「和」の思想の継承と発展である。島根県民はそれを誇りに思うべきである。私の個人的な理解であるが、「和讓」の意味は二つあると思う。一つは「和」、例えば平和、和諧、共存である。二つ目は「讓」、例えば、讓歩、禪讓、互惠である。

島根は古代では出雲、出雲の国といった。雲州ともいわれる。日本で最も早い時期から鉄器の産地であった。「日本創生」の神話、「国讓神話」などがここに現れていた。

ここに「和讓」思想が誕生するのは歴史的必然だといえる。

東洋文化と西洋文化の差異

人類の文化史上には東洋文化と西洋文化（西洋文明とも言う）がある。これらの性格は全く異なり、鮮明な対照をなしている。

中国の有名な国学の大師、筆者の母校である北京大学東洋言語文学の初代学部長で、元副学長の季羨林先生の研究によると、有史以来今日まで、人類は4つの文化体系を作り上げてきた。①中国の文化体系（日本の文化はその中に含まれるが、そこには中国文化の改造と発展がある）、②インドの文化体系、③古代ヘブライ、エジプト、バビロン、アッシリア、アラブ、イスラムのユダヤ文化体系、④古代ギリシャ、ローマ、近現代の欧米国家のヨーロッパ文化体系である。この先生は「以上の4つの文化体系をさらにもう少しまとめれば、大きく2つの文化体系に分けることができる。ひとつ目は東洋の文化体系で、上記の1、2、3の文化体系が含まれる。ふたつ目は西洋文化の体系で、上記4番目の文化体系である」と考えられている（『暢談東洋智慧』という書物：商務印書館2004年5月第1版）。

この2種の文化は明らかに異なっている。性質が相違している。筆者はこれらの相違を次のようにまとめておいた。

1、思惟方式の相違

日本の有名な歴史学者の村山節氏と、経済論家で作家の浅井隆氏が共著された「文明と経済の衝突」という本に浅井隆氏の序言がある。その中に「東洋と西洋文化の最も根本的な違いは思惟方式の相違にあると思う学者がいる。この学者によると東洋の思惟方式、東洋文化の特徴は『総合』であり、西洋の思惟方式、西洋文化の特徴は『分析』であるという。」この学者は季羨林先生である。

哲学学術用語にいうと、東洋の文化の「総合」型の思惟方式

は「合二為一」（二が合わさって一にする）であり、西洋文化の「分析」型の思惟方式は「矛盾の対立性・闘争性を強調する」という。

2、内容意味の相違

東洋文化の基本は「天人合一」（天と人は一体化）（中国古典名言録、42～49ページを参照）だと主張し、西洋文化の特徴は「征服する」である。換言すれば、前者の主張は「文」（ソフトパワー）、後者の主張は「武」（ハードパワー）である。

前者は、例えば儒家の「天人合一」（天と人は一体化）、莊子の「天地与我並生、而万物与我為一」（天地と私は並存し、万物と私は合わさって一つとなる）、仏教思想の「梵我一如」、「依正不二」（仏と私は全く同一である、人は宇宙の万物と関わっているとの主張）など、皆同じ意味である。「天人合一」での天とは正しく「大自然」の中の人と自然の二つが合わさって一つになること、つまり相互に協調すること。「天と地に合わせて徳を、日月に合わせて明るさを、四季に合わせて秩序を、鬼神に合わせて吉凶を得る。先天は人に合わさる、後天は天時に順応する」（周易・乾・文言）。これは自然の法則に適應するものである。

「征服」を特徴とする西洋文化は自然界を征服することにある。例えば「自然征服」、「自然支配」、人類に対して強制的に服従させ、征服する。例えば植民地主義、帝国主義は武力を使ってその他の民族に対処し、他人を制圧し、強制的に服従させるため残酷な殺りくを行うことをいとわず、甚だしきに至っては

その民族を絶滅させる。

これが東洋文明と西洋文化の最大に違う点である。

西洋の「征服」文化は「報復」をもたらしてしまった。自然界は、例えば生態環境が破壊され、地球が温暖化し、資源が枯渇しており、公害が深刻となり、人類の社会面でも、例えば南北の格差、貧富の格差、道徳（精神）の喪失等々、人類はこれらに相応する代価を払っている。

3、宗教信仰の相違

中国と日本は「多神教者」で、「万物には魂がある」と考える。山脈、河川、森林、さらには動植物など、世の中の万物は全て霊性を持っており、全て神になると思われる。西洋文化は、神は一つ、「神」しかないと考えている。

4、伝播方式の相違

中国の文化を例にすると、文化、文明的な伝播の方式は「平和的」であり、先方と「同化」、「融合」して受け入れ、そして新しい文化を形成する。先進したものが後れたものを消滅させるのではない。このことは中国文化の日本への伝播に最も鮮明に表れている。日本の伝統的文化は根が中国にあるが、今の日本文化は中国文化との違いもある。比べて見れば日本文化は発展させ、自分の特色を持ち、ある面では「青出於藍勝於藍」（青は藍より出て藍より青し）に達した。

西洋文化の伝播は常に戦争を伴う。つまり「武力征服」である。歴史上でも改めて言うまでもなく、現在のイラク戦争は最も典型的な事例である。アメリカはその「普遍的な価値観」を

推進させるため、国連を横へ投げて、独自で最も近代化している軍事的技術を使って、派遣軍隊をイラクに侵入させ、サダム政権を破算させた。今すでに明らかになっているが、今回の戦争は最低限の口実（イラクが大量破壊兵器を持っている）さえもなかった。アメリカのブッシュ政府が頼っていたのはただ覇権主義、圧倒的軍事の力だけである。その思想の根源は西洋文化にある。

中日両国の共通点

中日両国は同じ東洋文化体系に属している。共通点はとても多い。例えば

1、中日両国では「多神を信奉している」。その上、各種の神は平和共存しているので、換言すれば、「共生」しているので、互いに干渉しない。「貴方が生きるか、私が生きるか」、「私は生きるなら貴方は死ななければならない」といった対立は存在しない。

2、そのため、宗教上でも多種の宗教が共存するのである。中国では、儒学、仏教、道神の三教がある。これらには互いに影響しあう所も吸収しあう所もある。例えば日本の神道は初期に「神」と「仏」の融合、「神社寺」の発展段階があった。中国で、嵩山少林寺は三教（儒、仏、道）合一という石碑がある。

3、「和」の思想は、中日両国の共通文化の基礎である。これはとても重要なところである。「中国古典名言録」の中では、「神仙関係」の論述が78ページもある。「中庸和合」という内容

が73ページもある。ここから、中国の古典文化が「和」という思想をどれほど重視しているのかが分かり、「和」の思想が中国文化の基調と核心であることが分かる。その上、この思想はずっと継承され、中断したことがない。「論語」の「和為貴」（和は最も大切である）から康有為氏の「大同書」まで、更に胡錦涛氏の「和諧社会」（調和が取れた社会）および「和諧世界」論まで同じ流れを汲んだのである。

日本は明治時代の有名な漢学家の服部宇吉氏が「支那研究」の中に中国が「平和主義者」だと語っておられ、実際的な研究の結論と合致している。

聞くとところによると聖徳太子様の制定された「十七条憲法」の第一条も「和為貴」（人の和は最も大切）だと言われているのである。これはきっと彼が中国の文化を学ばれたことによるものと思う。「和」の思想は常に日本の文化の核心であることは注意するに値することである。歴史上の一時期を除いたら、日本は常に一つの平和的な国家であった。

小松先生の理念

特に第2次世界大戦の後、日本は「平和憲法」（アメリカ人が制定したが）に従って、「貿易立国」（貿易で国を作る）の国策を実行され、常に「平和的な発展」の道の上で歩いておられ、世界的好評を勝ち取っている。

日本国民が正しい選択を行い、平和を愛し、戦争に反対するのは皆の切実な願望である。

一人の企業家として、それほど大きくない企業の経営者として、小松昭夫先生がその長期にわたる社会活動の中で、平和主義を確立した人だというイメージがある。思想的にすごい功績を残している。

第1、「和譲」の思想を尊重する（出雲大社の宮司・千家達彦様が「和」と二宮尊徳様「推譲」の思想によって確立したという）。

第2、「対立する文化から共生の文化へ」。

第3、「国民国連」を創立する構想を出した。

ということで、小松先生は日本の社会の先頭を歩いておられ、日本の広大な国民の最も望む前進方向を代表されており、広く宣伝して学ぶことに値するといえる。

この点から、確かに「太陽（中国古典名言録）が出雲から出て昇る」といえる。

（翻訳 人間自然科学研究所理事 魏亜玲）

※このスピーチは2009年2月22日「竹島の日」に松江市で開催した、「混迷の時代、出雲から陽が昇る」（主催：一般財団法人人間自然科学研究所）でのシンポジウム「国民国連構想と朝鮮半島と日本列島の役割」で発表された。